

5. 「歴史総合」の教科書をよむ(1) —同時代の横のつながり

2025.11. 7. 大橋 幸泰

はじめに

「歴史総合」の教科書／日本史と外国史を分断しない近現代史(実際には近世の途中以降)
→求められる視角／ a.同時代の横のつながり(今回)、 b.同時代の比較(次回)
*本日の課題／横のつながりを意識すると、どのような歴史像が構築できるかを考える

1. アジアの繁栄と西洋勢力

【注目史料】

・蘇州の繁栄「姑蘇繁華図」(1759) pp.36
・江戸の賑わい「濠代勝覧」(19C 初) pp.17
→ 18-19C 初、アジアの繁栄／経済・社会の成熟 pp.34-39
*アジアにつきまといがちな停滞・後進のイメージ(とともに、西洋人によるアジア人への差別観念)／どのように形成されたのか？

近代における西洋勢力のアジアに対する優位性／西洋勢力の植民地拡大による創造へ

*大分岐論(ケネス・ポメランツ)によれば、18C中までヨーロッパとアジアでは経済的に差異はなかった
→ヨーロッパ(特にイギリス)は産業革命を経て、アジアより経済的に優位に立つ pp.46-49 / 石炭と新大陸(アメリカ)という幸運を利用／人口増加と市場経済を支える条件が存在
*増産に必要な燃料・食糧・繊維・建築用材などを調達することにより実現／偶然的要素
→このトピックが意図すること：ヨーロッパ中心史観の克服を企図／西洋勢力による植民地獲得競争をとともなう帝国主義が必然であったことを相対化

2. 海を越える市民革命

【注目史料】

・アメリカ独立宣言(1776)と削除された文 pp.51
→奴隷制を否定していない／ヨーロッパ各地の市民革命へ波及
*市民革命はだれのための変革か？

アメリカ独立宣言の天賦人権説 pp.51 / その前提に、自然科学の展開にとともなう啓蒙思想家の登場／自然法の概念に基づく社会契約説 pp.45

→フランス革命(1789) pp.52-53 ほか、ラテンアメリカ諸国の独立やヨーロッパ各地の革命運動へ影響 pp.56-57 / 「諸国民の春」(19C 中)

*ただし、ブルジョアの経済活動を妨げる既存の秩序を打破することが最大の目的 pp.50
→効率性を向上するために国家としての一体性(ナショナリズム)の希求 pp.69 / マイノリティへの抑圧、奴隷制・民族差別・性差別をとともなう国民の創出 pp.53

*資本主義経済の確立／ブルジョア白人男性の優位性を確保する動向が存在 pp.47
→西洋勢力のアジア進出とともに、非西洋地域における抵抗運動／たとえば、インド大反乱(1857-1859) pp.74
→アジアにもナショナリズムと市民革命の理念が波及

*オスマン帝国のミドハト憲法(1876) pp.72 / 日本の自由民権運動(1880 代)と大日本帝国憲法(1889) pp.90-91

→このトピックが意図すること：近代における市民革命拡散の意義と矛盾の自覚化が必要

3. 地域の紛争と統合

【注目史料】

・ラインラント進駐に対するドイツ政府の見解 pp.146 / 第一次大戦後のヴェルサイユ条約(1919)とロカルノ条約(1925)pp.122-123 を破棄する行為

・満洲事変の風刺画 pp.146

* 第二次大戦の前提/地域の紛争はどのようにして世界規模の戦争に進展するのか?

・ドイツ：自国の自衛を口実に、ナチ=ドイツによる非武装地帯のラインラント進駐/イギリス・フランスとの対立へ pp.142-143

・日本：自国の自衛を口実に、日本による朝鮮・中国への勢力拡大/日本の傀儡国家として満洲国建国(1932)/朝鮮・中国との対立/そこにイギリス・フランスなどが主導権を握る国際連盟が介入 pp.144

* 枢軸国と連合国への統合と両者の対立/第二次大戦へ pp.150-151

→このトピックが意図すること：グローバル化した近代世界では、地域の紛争が地球規模の紛争に拡大することが容易/現代、アジアから遠く離れた外国の紛争も日本に無関係とはいえないことの自覚化が必要

4. 史学史的背景

国民国家(近代に成立したナショナリズムを基盤とする国家)による一国発展段階論への批判

* 発展段階論では、低開発国も先進国と同じ道を進むと考えられていたが、実際には実現不可能

→グローバルヒストリーという視点

a. 特定商品を媒介につながる経済システム/たとえば、茶と砂糖 pp.60-61 など

b. 感染症と環境問題/たとえば、コレラ、コロナ、地球温暖化など

c. 分業体制による世界秩序/世界システム論(イマニュエル・ウォーラーステイン) pp.59

* しかし、グローバルヒストリーはミクロな歴史を軽視/世界システム論も結局は西洋中心的歴史理解

おわりに

日本史と外国史との横のつながりを注視すること/国民国家単位で物事を発想することの誤りを促す

→ただし、課題も存在/国民国家における多様性を念頭に置かないと、次の問題が起こる

a. 国民国家を越えないミクロな歴史を軽視する可能性

b. 国民国家を単位とする発想をかえって再生産する可能性

【参考文献】

岸本美緒『東アジアの「近世」』(山川出版社、1998年)

水島司『グローバルヒストリー入門』(山川出版社、2010年)

ケネス・ポメランツ(川北稔監訳)『大分岐—中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』(名古屋大学出版会、2015年)

パトリック・カール・オブライエン著(玉木俊明訳)『大分岐論争とは何か—中国とヨーロッパの比較』(ミネルヴァ書房、2023年)

イマニュエル・ウォーラーステイン(川北稔訳)『史的システムとしての資本主義』(岩波書店[岩波文庫]、2022年)

【付記】

・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。